

「パン種に気をつけなさい」

2014年09月16日

マルコによる福音書8章14節～21節。弟子たちはパンを持って来るのを忘れ、舟の中には一つのパンしか持ち合わせていなかった。そのとき、イエスは、「ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい」と戒められた。弟子たちは、これは自分たちがパンを持っていないからなのだ、と論じ合っていた。イエスはそれに気づいて言われた。「なぜ、パンを持っていないことで議論するのか。まだ、分からないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか。覚えていないのか。わたしが五千人に五つのパンを裂いたとき、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」弟子たちは、「十二です」と言った。「七つのパンを四千人に裂いたときには、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」「七つです」と言うと、イエスは、「まだ悟らないのか」と言われた。

主イエスと弟子たちの一行は、舟に乗って次の伝道地に向かっていった。弟子たちはパンを持参することを忘れていた。その時、主イエスは、ファリサイ派の人々とヘロデのパン種に気をつけなさいと言われた。フェリサイ派とは律法を厳格に守り、それを民衆に権威と形式を持って強要し、息苦しい宗教体制を築いていた宗教団体である。ヘロデとはローマの傀儡であるガリラヤの領主で、民衆から経済的搾取をしていた政治家である。パン種とはイースト菌である。パンを焼く時、パン種を入れて膨らみますのである。主イエスは、ファリサイ派の人々とヘロデの膨らますパン種に気をつけよと言われた。

弟子たちは、言葉の意味を理解できなかった。パンという言葉だけが響き、彼らはパンを忘れたことをとがめられたと論じ合った。そこで、主イエスは叱責している。パンを忘れたことを議論することはない。あなたがたは心が頑なで、目が見えず、耳が聞こえず、悟ることができない。覚えているか。五千人に五つのパンを裂いた時、残ったパン屑の籠は幾つあったか。弟子たちは「十二です」と答えた。四千人に七つのパンを裂いた時、残った籠は幾つであったか。弟子たちは「七つです」と答えた。記憶に新しい喜びの出来事はしっかり覚えていた。弟子たちの答えを聞いて、「まだ悟らないのか」と言った。

舟の上で交わされた会話は何を指しているのか。ファリサイ派の人々は、イスラエル人が最も大切にしていた律法を盾に、自分たちの宗教的権威を増大するために民衆を支配していた。ヘロデは政治的、経済的利益を拡大するために、民衆の上に君臨していた。彼らは人間の尊厳を認める「愛」という実体はなく、パン種を入れて膨らますように、ひたすら自らの権威と利益を求める見た目に大きい集団を形成していた。それに対し、少ないパンでも分かち合って、民衆は満腹し、喜び合った。そこには人間に対する「愛」が息づいていた。主イエスは、人を支配し、奪って膨れ上がるファリサイ派の人々やヘロデではなく、共に生きるために分かち合うところに「神の国」の現実があると諭された。

お金が集まるところに権力は強まる。今日、お金と権力を求めて壮絶な戦いがグローバルに繰り広げられている。人の命は軽視され、戦火による無残な死者を出し続けている。地球は痛み、自然災害という反乱を起こしているかのようである。パンの奇跡を喜び合う世界を望みたい。愚直に「命と平和」を守るため、声をあげ、小さな行動の一步を踏み出すことが「神の国」を信じ、生きようとする者の務めであろう。